

説教ワンポイント

打ち砕かれた

使徒二・一、二

ようやく会えた復活のイエスが四〇日目、天に上げられ、弟子たちは再び自分たちだけになりました。

彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」(一・二四)

この光景からどのようなことが想像されるでしょう。さすがイエスの弟子たちは信仰に厚く、常に祈りを欠かさなかったのだなあ…？

祈りの人」といえば尊敬の目で見られるかもしれません。でも、逆のことも言えます。そのとき彼らには祈ることしかできなかつたのだ！

そもそもイエスが十字架にかかったとき、弟子たちは全員クモの子を散らしたように逃げ去ってしまいました。たとえ皆があなたを見捨てて

も私だけは…」と豪語した。ペトロも我さきに走り出しました。信仰に厚い、祈りの人？ お世辞にも言えませんし、そのことは誰であろう本人が一番よく分かっています。この四〇日から五〇日にかけて、イエスの復活の喜びもつかのま、きつと彼らは再び自分の弱さと向き合うことになったでしょう。彼らの心は打ち砕かれていた。もはや祈ることしかできなかつた。

実はそれこそが祈りだと思うのです。自分の誇りも、見栄も、自信も、もはやまったく自分を支えることはできない。そのとき祈りは本物となり、なぜなら、その人は、今はただ神の力を待ち望むしかないから。打ち砕かれた本物の祈りを通して、神の恵みはあますことなく私たちの心の奥底に注がれ、溢れます。私たちも今回讚美歌21の祈りにおいてそれを実感しました。溢れる恵みを目の当たりにしたとき、神の偉大さに、私たちは再び打ち砕かれます。